

「どじょう、どじょう……。」  
ぼくの心ぞうの音が、ドキンドキンとどんどん大きくなっていきます。

(どじょうもない。ぼくのせいだ……。)

それは、ある日曜日のことでした。その日は、お父さん、お母さん、ぼくと弟の四人で大がたスパーに買い物に来ていました。お出かけしたときの弟のお世話は、兄のぼくの仕事です。弟はまだ小さいなのでぼくの助けが必要なのに、自分ではあまりそのことを分かっているまいやうで、いつもど

中国新聞社賞

弟はどこにいった？

呉中央小3年 白柳晃希

も自由です。ごきげんなときは、「はい。おにいちゃんにあげるよ。」とおもちゃやおかしをくれる天使のような弟です。しかし、きげんが悪いときは悪まのしっぽがにやろりと生えて、ぼくの悪口を言ってくるのです。それに、ぼくの大好きなおやつのスイートポテトを、自分は食べたのによごからこっそり取って食べてしまいます。はらが立ちますが、ぼくはお兄ちゃんなのでがまんするしかありません。この日も、お父さんとお母さんが買い物をするまで、いつものようにおもちゃ売り場で弟のお世話をしながらまっています

た。おもちゃを見ながら、

「これほしいね。」

「これも楽しそうだね。」

と、なかよく話していたはずなのに、ほんの少し目をはなしたすきに弟のすがたが見えなくなってしまうのです。

(さっきまでいたのに。どこにいったんだろう……。大へんだ。)

ぼくの指先が冷たくなりまりました。こんなことは今まで一回もありません。

「どじょういるの。」

名前をよびながら何度も何度もおもちゃ売り場をさがし回りまし

た。息が苦しくて、なまごうな気持ちです。ぼくはおもちゃ売り場をどび出して、お店の中を走り回りました。冷たく食ひん売り場、お酒売り場……。どこをさがしてもやっぱり弟のすがたはありません。

(だれかにつれさられたのかな。ごめんね、ぼくが見てなかったから……。)

ずっと同じ所を回っていると、お父さんたちに会いました。なまごうになりながら伝えて、またぼくはあちこちさがし回りました。

もうこれっきり弟に会えなくなったら一生ごうかいます。スイートポテトはいつでもあげるし、た

まに悪口をいわれてもかまいません。こんなに弟に会いたくなかったのははじめてでした。

そのときです。

エレベーターの近くで、お父さんといっしょにいる弟のすがたが見えました。

「ああよかったあ。もう、どこにいたんだよう。勝手にどっかに行くな。」

弟は自分がまいごになったとも思わず一人でニコニコしていました。やっどドキドキがおさまり、ほっとしました。

今月、もう一人弟が生まれたので、これからは二人のお兄ちゃんです。

(ふう、ますます大へん。がんばらなくちゃ、ぼく。)

【評】自分にとって天使でもあり悪魔でもあると感じていた弟が、お店で見えなくなってしまうときのぼくの心の動きを見事に表した作品です。

書きだしの言葉や、間、心臓の音の表現から、ぼくの不安が伝わってきて、一気に作品に入り込める工夫がされています。弟の紹介や弟を探しているときのぼくの様子を表す、豊かな表現と構成の工夫は、まるで絵本のページをめぐっているかのようです。

これからもしばらくは続きごうなぼくと弟の関係。けなげに弟のことを想い続ける白柳くんは、エールをおくりたいと思います。